

ローエイシアを活性化させよう



日本ローエイシア友好協会常任理事
ローエイシアビジネス法部元部会長
鈴木正貢

ローエイシアの会員になって今年で年齢満85歳を迎えることとなりました。アジア地区に於いても法の支配の理念に基き地域社会の平和と経済活動の活性化の為に活動してきたのがローエイシアであると理解して居ります。

コロナ禍の影響もあって、このところ海外で開催されたローエイシア大会には残念ながら参加できないで居りますが、ローエイシアの一会員として、アジア地区が抱える諸問題は何か、その問題の解決の為にどうすれば良いのか、ローエイシアの日本人会員として何が出来るのかを考えさせられる日々を送って居ります。

あれこれ考える中で、是非日本ローエイシア友好協会の会員の皆様に紹介したい人物が居ります。第二次世界大戦前の外国で最も有名な日本人外交官であり、国際連合の前身である国際連盟で日本代表として活躍され、晩年には国際司法裁判所の前身である常設国際司法裁判所の創設に関与し、その所長にまで成った安達峰一郎についてであります。もし安達峰一郎が現代に生きていたとしたら、

アジア・太平洋地域に生起している諸問題にどう対応するであろうかを想像してみるのも有益ではないかと思った次第です。

安達峰一郎は明治2年(1869年)山形に生まれ、15歳の年、東京の司法省法学校に進学したい旨、父宛てに出した手紙には「法律は世の中を治めるのには最も大切なものである。もし法治国家でなければ、乱世の世の中になってしまう」「臣民たるもの一日も早く法律を完全にして社会の安寧幸福を進めなければならない。」と述べ、第一高等中学校在学中、東京帝国大学法科大学法律学科に入学するに当り、法学界の権威であった穂積陣重先生に宛てた書状には「都下数千人の法学生を見ると、大抵はその志望が偏小にして、ただただ民法、刑法、商法等の条文を暗唱し、判事あるいは代言人の職業に就こうとする者しか居らない。」「その万国公法、国際法等を精究して大いに国家のために力を致さんとする者に至りては、その数誠に少なく大変遺憾である。(日本のような)弱小国家が列強に伍して外交を全うしようとする

からには、深く国際の理法に通じ、臨機応変に対応できる者を、外交の渉に当たらしめることが絶対に必要である。」「自分としては、非才ながらも国家のために身を致すの志があり、奮って外交法学を治めんと慾す」と述べ、将来外交官としての途を目指す決意が表明されている。

それでは、安達峰一郎は学生時代に懐いた外交官や国際法実務家として、どのような場面で活躍されたのであろうか。

最初は、外務省に書記官として在任中(当時36歳)、ルーズベルト大統領の仲介で日露戦争の後始末である日露講和会議が開催されたが、日本側の首席全権の小村寿太郎外務大臣に命じられ、実際の交渉の段取りとか条約案の作成、会議への参加等、随員として講和会議に加わりました。この講和条約の妥結は、小村寿太郎全権の強烈な外交交渉力の成果と評されているが、この裏で支えた安達書記官の力によるものであるとの評価が、小村全権からもなされている。この講和条約の起草に当たった功績を認められ、安達峰一郎に対し「法学博士」の学位が授与されました。

次に忘れてならないことは、第一次世界大戦で敗戦国となったドイツに関するヴェルサイユ講和会議における安達博士の活躍ぶりであります。この講和会議の日本首席全権委員は西園寺公望、次席全権委員は牧野伸顕でありましたが、当時の駐ベルギー公使の安達博士も随員として参加しました。この戦争は、ヨーロッパにおける各国入り乱れての戦いでありましたが、安達博士は、この時、利害の対立する各国の間を上手に調整し、「平和と公平」を旨とするヴェルサイユ講和条約を締結させるのに積極的役割を演じました。

ヴェルサイユ講和会議が基になって国際連盟

(国際連合の前身)が創設されることとなります。安達博士は、国際委連盟の第1回総会には日本代表団の随員として出席しましたが、第2回総会から第10回総会までは日本代表委員として活躍されました。ヴェルサイユ講和条約の第159条には軍備制限の条項がありますが、この条項を如何に実施していくかを検討するヴェルサイユ条約実行委員会の委員長を安達博士が務めておりました。国際連盟の最も重要な任務の一つが連盟参加各国の「陸海空軍の縮小」即ち「軍縮」の事業であると安達は述べております。これ正に現代における「核軍縮」問題と一致し、安達峰一郎が御存命であればどのような案を提案なされたか興味のあるところですよ。

安達博士は、国際連盟の諸活動に参加する一方で、国際連盟の司法機関である常設国際司法裁判所(現在の国際司法裁判所)の創設に関与し、昭和5年に駐フランス大使を辞任し、常設国際司法裁判所の裁判官に就任し、翌年には同裁判所の所長に選任されました。所長に選任された年、満州事変が勃発、2年後には国際連盟から日本が脱退する等、日本を取り巻く国際情勢は急激に変化。所長就任の3年後病に倒れ死去されたこともあって、日本を取り巻く諸問題解決の為に安達博士が如何なる活動をなされたかは不明であります。

オランダ政府が常設国際司法裁判所の置かれているオランダ・ハーグの平和宮に於てオランダ国葬の礼をもって安達博士をおくったことから判る様に、安達博士が如何に優れた人物であるかを国際社会が認めていたということであり、安達博士の様な若者が次世代を担う人物として強く求められていることを強く感じる次第であります。